

私は2013年8月から2014年6月までの10ヶ月間スウェーデンのルンド大学に交換留学をしました。ここではその様子について報告させて頂きます。

1. 建築学科の様子

1_1. A-huset : 建築学科棟

ルンド大学の建築学科はルンド北東部に広がる LTH (Lunds Tekniska Högskola) とよばれる工学部のキャンパス内に位置しており、旧市街地からはすこし離れた静かな丘の上にあります。LTH の建物は基本的にどの建物も外観や作りが非常に似か寄っているため、それらを区別するためにそれぞれアルファベット一文字ないし二文字が与えられています。建築学科は建築を意味する Arkitektur の頭文字である「A」を取って A-huset (A-building の意) と呼ばれています。ファサードに大きく A と書きかれているのはそのためです。

5階建ての A-huset は、1階に図書館や展示スペース、座学用の講義室、工作スペースなど生徒がシェアする場所が配され、2階及び3階にスタジオルーム、4階及び5階が教授やスタッフのオフィスという機能配置になっています。また隣のデザイン学科の建物とは廊下で繋がっており、デザイン学科の方にあるレーザーカッターや3Dプリンターを使うときに部材や部品が雨にぬれる事無くスタジオルームまで持ち帰られるようになっています。



正面口から見た A-huset

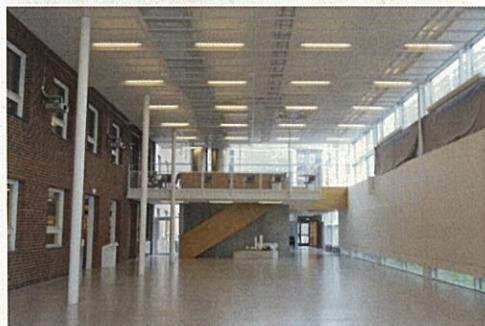
1_2. Arkitekturskolan : 建築学科

ルンド大学に限らずスウェーデンではアカデミックイヤーが日本とは異なり、9月から1月までを秋学期 (Höst Termin)、1月から6月までを春学期 (Vår Termin) としています。基本的に秋学期と春学期の間には短い年末休みがある程度で日本のような冬休みや春休みというではありません。代わりに夏休みはとても長く、公式的には3ヶ月程ですが、私のとった授業は4月に終ったため、実質4ヶ月半ほどあることになります。

さて、私が留学して最初のセメスターにあたる Höst Termin では、スタジオを一つ、座学を一つとりました。スウェーデンでは各学期毎に30単位とらなければならないという大学共通の要項があり、それは正規の学生、交換留学生問わず満たさなければなりません。ルンド大学では一つのスタジオをとると実技の部分に15単位、理論の部分に7.5単位とえられます。また座学はどれも一つ7.5単位となっているため、多くの学生はスタジオと座学を一つずつとる選択をします。また、ルンド大学では月曜日から水曜日までがスタジオ、木曜日と金曜日は座学と曜日によって行われる授業の内容を分けており、午前も午後も行われるそれぞれの活動がち合わないようになっています。普通座学と聞くと90分や100分という「コマ割り」を想像してしまいますが、こちらではそのような構成ではないため、慌ただしく教室を移動する必要がなく、一日を同じメンバー、同じ教授と過ごす事が出来ます。個人的にはそれがとても良いと感じました。



フォワイエの様子



展示スペースの様子



スタジオの様子

Höst Termin ではスタジオ以外にスカンジナビアの建築を総括した授業をとり、現代建築を中心にしてスウェーデン・ノルウェー・デンマークの建築潮流を学びました。またその授業の中でもエクスカーションがあり、オスロとストックホルムの建築を教授と共に見て回ることができ、非常に勉強になりました。

一方、後期である Vår Termin ではスタジオをとる代わりにコペンハーゲンにある建築事務所でインターンをしました。ルンド大学ではインターンシップを行う正規の学生に対して一学期でとらなければならない単位に相当する30単位を与えており、インターンをする期間学生は大学の授業をとらずにインターンシップに集中することができるような環境があるのですが、規定上残念ながら交換留学生に対しては単位を与えられないため、私はインターンと平行して大学の座学のみで30単位をとらなければなりませんでした。しかし、それは建築学科の授業だけとるのは時間割上むずかしかったため、言語学部のスウェーデン語の授業を2つと、建築学科の座学2つと合わせてなんとか必要な単位を満たしました。

Vår Termin では前期とったスカンジナビアに関する授業の続きの授業に加えてマテリアルとディテールに関する授業をとりました。その授業は座学で基本的な建築の材料の性質を学ぶ一方で、大学外では教会等古くから立つ建築物の施工技術や仕上げの方法を学んだり、漆喰や石など建材を扱う作業場を訪ね施工の現場を見せて頂いたりととても現実的なことを学ぶ事が出来ました。

1_3. インターンシップ

先述の通り Vår Termin では大学のスタジオをとらなかった代わりに週4日でコペンハーゲンにある建築事務所でインターンシップをしました。LETH&GORI という名前のインターン先の事務所

は、ボスである Uffe Leth と Karsten Gori の 2 人しかいない非常に小さな事務所である一方、いくつもの設計競技で 1 等をとっている新進気鋭の事務所です。事務所の規模が小さいのと、まだ設立から数年しか経っていない事もありスウェーデンでもデンマークでも知名度はそこまで高くないのでですが、偶然私のとったスタジオのゲストクリティークとして Uffe がいらしていたことがきっかけで LETH&GORI の存在を知り、エスキスや講評会での Uffe とのディスカッションを通じてインターンしてみたいと思うようになりました。インターンを申し込んだときも既にお互いの事を知っていた事もあり 2 つ返事で受け入れていただくことができ、とても幸運だったと思います。

インターンではブダペストのハンガリー音楽博物館の国際設計競技を担当しました。この国際設計競技では建築事務所にしか応募資格が無いため、今まで大学で学んできた設計の知識に加えてより実践的な技能が必要で、それらエンジニア的な要素と意匠設計との突き合わせをどうすればよいかボスとのディスカッションを通じて学ぶ事が出来た事はとても貴重な経験だったと思います。とくにスタッフ 0 人の一方で、私を含めてインターンシップ 2 人とボス 2 人の計 4 人しか事務所にいない環境は非常に学ぶ事の多いものでした。

1_4. 修士論文の準備

留学中、大学の授業やインターンシップなど定期的な活動とは別にもうひとつ行っていた大きなことがあります。それは修士論文の準備です。わたしは留学に渡航する段階で修士二年だったため、帰国から修士修了まであまり時間がないと思い、留学中に修士論文のテーマを見つけようと思いました。そのため、留学中は大学の図書館や市立図書館などを頻繁に訪れスウェーデンの建築に関する本をたくさん読みました。留学前からスウェーデン後を独学で学んでいたこともありスウェーデン語で書かれた本も辞書を引きながらもなんとか読む事ができました。その結果、ルンドのあるスコーネ地方を中心に活動していた Bernt Nyberg という興味深い建築家をみつける事ができました。彼はルンド大学を作った Klas Anshelm と共に、かの有名な Sigurd Lewerentz の数少ない弟子の 1 人としている人なのですが、日本は当然スウェーデンですら無名に近い建築家です。しかし彼の作品は師である Lewerentz の晩年のマテリアル・ブルータリズムの思想を存分位受け継ぎつつもどこかオリジナルとは違う独特な作風をもっており、そこに現代的な価値があるのではと直感しました。まだどのような論文をかくことができるのか分かりませんがこれからも彼に関する言説や作品の研究を続け修士論文まで持って行こうと日々思い研究しています。



スタジオのロンドン旅行の様子



インターンシップの様子



国際設計競技の打ち上げの様子



保育園の様子

1_5. 家族との日々

以上のような学生としての生活を送っていたと同時に、実は私は妻と娘と 3 人で滞在していたため家族との生活がありました。渡航時 3 歳になったばかりの娘は、この 1 年間現地の保育園に通いたくさんの友だちをつくりました。彼女も当初はスウェーデン語が分からずしばらくは身振り手振りでコミュニケーションをとっていたようですが、3 ヶ月程したころから少しづつスウェーデン語を話すようになり、一年経った今では流暢に話せるようになりました。またスウェーデンの保育園そのものが日本の保育園とは比較にならない程自由で、自然にあふれた場所で力一杯遊ぶ事の出来る環境があり、教育に対する切実さを兼ね備えている非常にすばらしいものであることを知る事が出来ました。朝 6 時に起き 7 時から夕方 5 時まで娘が保育園に通う一方で、妻は現地の言語学校へ通っていました。妻はスウェーデン語はおろか英語もままならない状態でスウェーデンに渡航したのですが、一年間のプログラムを終えた今では私よりもスウェーデン語が使えるほど上達しました。妻の場合留学という形ではない為直接学問上のキャリアにはならないかもしれません、心理学を専攻しているため帰国後はスウェーデンの移民問題を研究素材にしようと考えているようです。

多くの留学生のように単身で留学した訳ではないため、彼らが体験したであろう学生同士の関わりとは異なりより社会的な広がりを持ってスウェーデンという国を理解できた感じがします。実際娘がいた事は非常に大きく、保育園の先生やお友達、お友達の家族、こちらで暮らしている日本人の家族の方など、建築学生としては決して出会う事は出来なかったであろう人々との出会いはとても貴重なもので、なにも代え難いものだったとおもいます。また居住許可の申請や住居の確保、娘を保育園に入れるために行った待機児童申請など、家族がいたが故にさまざまな申請がとても煩雑であった事も今では良い経験だったと思います。

1_6. 今後について

以上のように今回交換留学としての 10 ヶ月間という限られた時間のなかでを通じて建築だけでなく多角的にスウェーデンという社会について学ぶ事が出来ました。しかし、一方でまだまだ学び足りなかった事やもっと知っておきたいと思う事が残ってしまった事も事実でした。実際に修士論文に関してはルンド大学の授業やそれらと平行して行ったインターンなどに多くの時間を費やすざるを得ずなかなか進める事は出来ませんでした。そのため論文のめどをつけるため当面はこちらにもう少し残り研究を続けようと思っています。またルンド大学でスカンジナビアの建築に関する授業をされていた Mats Edström 教授のご厚意で交換留学生ではなくなる 6 月以降も修士論文に関してアドバイスをいただけるとおっしゃって頂きました。

とはいって、この 10 ヶ月に関してだけでも十分に多様な体験が出来た事をとても嬉しく思っています。是非今後も東京大学からルンド大学に行く留学生が増える事を期待したいと思います。